

鮭 鱒 彙 報

號九十三第 · 年一十第

日一月十年四十和昭

北海 道 鮭 鱒 保 護 協 會

(札幌市中之北北海道鮭鱒孵化場内)

最近の加奈陀及北米に於ける鮭鱒の研究……小久保清治(一)
 石狩河口採卵鮭卵の斃死原因に就て……岡田三浦五郎(六)
 鮭鱒孵化事業發祥の地に記念碑建設に就て……菊地覺助(三)

【彙報】

- 昭和十三年度鮭親魚捕獲採卵成績……………(一四)
- 昭和十二年度鮎漁獲高調……………(一七)
- 昭和十四年度北海道鮭鱒孵化場事業方案概要……………(一九)
- 紅鱒種卵分讓……………(二〇)

【會報】

- 第十一回總會記事……………(二〇)
- 會 員 消 息……………(二七)
- 會費領收報告……………(二八)

員動總神精民國

舉國一致

盡忠報國

堅忍持久

北海道鮭鱒保護協會々則

- 第一條 本會ハ鮭鱒其ノ他ノ養殖事業並ニ鮭鱒漁業ノ改善發達ト關係業者ノ連絡緊密ヲ圖リ以テ漁利ノ維持増進ヲ期スルヲ目的トス
- 第二條 本會ハ北海道鮭鱒保護協會ト稱シ北海道鮭鱒孵化場内ニ置ク
- 第三條 本會ハ北海道鮭鱒孵化場親魚捕獲受託者、鮭鱒漁業者及鮭鱒其ノ他ノ養殖事業並ニ漁業ニ關係有スル者ヲ以テ組織ス
- 第四條 本會々員ノ種類ヲ左ノ如ク分ツ
- 第五條 一 本會々員ノ親魚捕獲受託者、鮭鱒ノ免許漁業者及鮭鱒其ノ他ノ養殖事業經營者
- 二 本會々員ノ親魚捕獲受託者、鮭鱒ノ免許漁業者及鮭鱒其ノ他ノ養殖事業經營者
- 三 本會々員ノ親魚捕獲受託者、鮭鱒ノ免許漁業者及鮭鱒其ノ他ノ養殖事業經營者
- 四 本會々員ノ親魚捕獲受託者、鮭鱒ノ免許漁業者及鮭鱒其ノ他ノ養殖事業經營者
- 五 本會々員ノ親魚捕獲受託者、鮭鱒ノ免許漁業者及鮭鱒其ノ他ノ養殖事業經營者
- 第六條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
- 第七條 理事ハ總會ニ於テ會議ニ依リ會員中ヨリ選舉ス
- 第八條 理事長ハ理事中ヨリ會議ニ依リ會長外ヨリ推選スルコトヲ得
- 第九條 理事長ハ理事中ヨリ會議ニ依リ會長外ヨリ推選スルコトヲ得
- 第十條 理事長ハ理事中ヨリ會議ニ依リ會長外ヨリ推選スルコトヲ得
- 第十一條 理事長ハ理事中ヨリ會議ニ依リ會長外ヨリ推選スルコトヲ得
- 第十二條 理事長ハ理事中ヨリ會議ニ依リ會長外ヨリ推選スルコトヲ得
- 第十三條 理事長ハ理事中ヨリ會議ニ依リ會長外ヨリ推選スルコトヲ得
- 第十四條 理事長ハ理事中ヨリ會議ニ依リ會長外ヨリ推選スルコトヲ得
- 第十五條 理事長ハ理事中ヨリ會議ニ依リ會長外ヨリ推選スルコトヲ得

最近の加奈陀及北米に於ける鮭鱒の研究

東北帝國大學理學部 助教 理學博士 小久保清治

歐米を通じ鮭鱒類の研究の盛であるのは北米及び加奈陀で、就中加奈陀に於ける鮭鱒研究は最も旺盛である。本邦の如きは北洋に鮭鱒の一大漁場を控えてゐて、漁業的には鮭鱒は非常に重要なものであるが、其の基本研究に至つては甚だ振はない様である。然し鮭鱒や一般の水産研究ばかりでなく、我邦の科學は歐米に比しては何れの方面も一歩譲つてゐるわけであるから、水産學としても止むを得ぬ事ではあらうが、産業的に比較的大きな鮭鱒漁業を控えてゐる日本としては、せめて此の方面の研究だけでも歐米を凌ぐ様にしたいたものである。

鮭鱒の研究と云つても其の範圍は甚だ廣いのであるが最近數年間に外國特に加奈陀や北米で行はれた多くの研究を通觀して見るとやはり生態學的研究が多い。生態

學的と云つても色々の方面があるのであるが、研究題目から云つて第一が移動即ち洄游に關するもの、第二が食餌に關するもの、第三が測定學的研究、第四が年齢に關する研究、第五が移殖に關する研究などである。

洄游と云ふものは何れの魚類に就ても吾々の注意を惹くものであるが、鮭鱒では移動が海陸兩界にまたがり母川への洄歸性と云ふものがあるので、其の研究に甚だ興味があり最近數年間の研究では洄游關係の研究が最も多い。

此の方面の研究として著しい成績と思はれるものゝ一はブリチッシュコロンビアでフォースターと云ふ人の行つた洄游の研究（昭和十二年發表）で、これはソッキリアイ即ち紅鱒（*Oncorhynchus nerka*）に就て行つたものであ

るが、カルタス湖から海に下る紅鱒の仔魚の胸鰭及び脂鰭を切斷し昭和五年には十萬四千尾、同六年には三十六萬尾を放流した。其の結果昭和五年放流のものは親魚として洄歸したものが三・七%、昭和六年のものは三・五%である事がわかつた。此の實驗では放流尾數も頗る多いのであるし兩年度とも大差ない結果を得てゐるので、氏のあげてゐる此の洄歸率はかなりの程度まで信用し得るものと見てよいであらう。

同じく移動研究であるがハンツマン教授が加奈陀大西洋面の十二の河で産卵直後の鮭の標識放流を行つた。放流の地點は河又は河口であつたが、放流魚は何れも河に近くの海にあり、他の處女魚つまりまだ産卵を行はない魚よりもずつと河口に近く分布してゐた。而して再捕の結果は河により又同じ河でも年と時期とで異なるが、移動の通則として放流魚は増水さへあると「ケルト」即ちホツチャリの姿で溯上運動を起す。即ち之から見ると此の魚の溯上は産卵意識の爲ではなく、一種の流向反應であらう事が推察される。此の點はつまらぬ事の様であるが動物の習性を條件反應的にでも考へる時は重大なる意義

と云ふ結論もあり、クレメンズ氏（昭和十年）のB. C. コロンビアに於ける研究も大体同様である。然るに全く反對にブリチャード氏（昭和九年）の研究では、マツクリントン河で放流した鮭が母川には一尾も歸らず、六百哩も南方のフレザー河に溯上したと云ふ結果もある。

又別に歐洲産の鮭に就てはアルム氏（昭和六年）がスエーデンのアンガーマン河で研究した所では洄歸した數よりもはるかに多くの魚がやはり六百哩もはなれた地方に溯上したと云ふ事が報告されてゐる。斯の如くであるから洄歸の正確さの問題は場合によつて大に違ふのである。しかし之は鮭鱒の習性から見て矛盾してゐるのではなく、其の時期其の地方の環境條件の影響を受けたもので、つまり或る年に或る河水の注入量が非常に多く其の影響が明かに且つ遠く及べば魚はよく洄歸するが、此の反對の場合には洄歸しにくい。極端な場合には洄歸しない事もあると云ふ事になるのであらう。之れは鳩の歸巢性の失敗などからも容易に類推し得る事である。

次に鮭鱒は習性的に甚だ複雑なものであるから之れはやがて種族性の變異となり、此の類の形態的變異性の研究は興味があるに違ひないと思ふのであるが、それで

をもつて來るものと思はれる。

また同じく溯河運動についてブリチャード氏が「セツパリ」鱒（*Oncorhynchus gobuscha*）で行つた研究がある。B. C. コロンビアのマクリントン河及マツセー河で鮭の溯河性に及ぼす環境條件の影響を研究したものであるが、氏の研究では河の水位及び水量、従て雨量が溯河性に密接に關係し、兩者の間の關係は水温と溯河との關係よりもはるかに密接である事を述べてゐる。

これも大西洋岸で行はれた研究であるがホワイトと云ふ人が鮭の溯河性について實驗を行つてゐる。此の人によると大西洋の鮭では二年生を標識して放流すると、産卵期には三年生として母川に洄歸する。つまり未熟の早期にも洄歸性を明かにあらはす。しかし季節の遅れるに従て他の河川にも溯上する事を示してゐる。また親魚に標識せるものは雄雌多少の移動習性の差は示すが、要するに正しく母川に洄歸すると云ふのである。

一体洄歸の正確さと云ふ事は以前から一般的興味的になつてゐるが、之に就ては從來の研究としても結果は様々である。リツチ及ホルムス兩氏（昭和三年）のコロンビア河の鮭に就ての結果の様に鮭は例外なく母川に歸る。自分の手許にある此の方面の唯一の文献はモットレー氏（昭和十一年）の *Salmo komloops* に就ての研究であるが、此の人は二一六尾の魚に就て魚体に二十四條件を測定し之を測定學的に検討した。其の結果此の類の變異は比較的大きく、其の變異は成長率と性の成熟度とに密接に關係する事を指摘してゐる。此の研究は單に尾數の比較的少ない一組に就ての研究であるから、結果が種族的の重要性にまでは及んでゐないのであるが、異なる河川異なる時期について研究したならば興味ある結果が発見されるであらう。

一般に測定學的研究ではどの條件の測定が最も重要であるかはやつて見てはじめてわかるので、若干の測定を行つて此の條件を發見し研究を進める事が重要である。モットレー氏は頭比（体長と頭長との比）、鰭の位置、鰭比（鰭長と体長との比）などを主な條件として扱つてゐる。

るが、著者の経験では各種の魚類につき頭比は非常に變異性に富み興味があり、測定學的に重要なものである。勞多くして効比較的少ないのは鱈條數の測定で或種の魚類では無意味でさへある。

鮭鱒に就ての食餌習性又は餌料研究と云ふ事は此の類の生態學上には頗る必要な事であるが、從來あまり手がつけられて居ない様である。筆者の手許へ來てゐる論文としては前記のホワイト氏（昭和十一年）が太平洋鮭に就て東部加奈院で行つた研究があるのみであるが、之は仔魚の食餌の研究で氏によれば此の地方では初期の仔魚の食餌とするものはキロームスであるが、夏の成長の盛期には蜉蝣科の幼蟲、また秋には毛翅目のもの、幼蟲が普通である。尙ほ此の外に楮翅目、膜翅目、同翅目、雙翅目などの幼蟲も夏から秋にかけて主な餌料になると云はれる。即ち之を要するに仔魚時代の食餌は昆蟲類の幼蟲が主なものである。昆蟲類が鮭鱒類の主要な餌料である事は廣く知られた事で、湖水や河で鱒類が昆蟲類を飽食してゐる事は我國でも常に見られるが、筆者は且て湖上前の海の鮎の餌料を検したところ其の餌料の大半は膜翅類其他の成体昆蟲である事を發見した事がある。しか

として古いものではグール（明治四十三年）の太平洋鮭に就て行つた鱒の研究とか、フレザー（大正六年）の太平洋鮭の鱒の研究の如き、またギルベルト（大正七年）の太平洋岸の鮭類で行つた研究の如きもあるが、比較的近來の研究としてはリッチ（大正十四年）の北米で太平洋鮭に就て行つた研究（Bull. U. S. Bur. Fish., Vol. 41, P. 15）、又は前述のリッチ、ホルムス（昭和三年）の北米太平洋鮭で行つた研究（Ibid. Vol. 44, P. 215）などには此の方面の文献も出てゐるので研究の指針として適當であらう。最近の研究としてはブレアー（昭和十年）が加奈院の太平洋鮭に就て年齢と産卵移動の關係を研究してゐる。氏がが一五七尾檢した所では、鱒の産卵痕を檢してみると八六・三%は第一海年（淡水に何年か居て初めて海へ出たもの）で産卵し、二九%は二海年、一・八%は三海年で産卵すると報じてゐる。

尙ほ年齢と成長とに關し前述のホワイト氏（昭和十二年）の興味ある小論文を書いてゐる。之は体の各部の成長率が年齢に關係してゐる事を示したもので、例へば吾々が同じ休長の魚の年齢を鱒で決定した場合一年乃至二年も違つて居て判定に迷ふ様な事がよくある。此の様な

し鮭鱒としては成体として外洋にある場合には關係は全く異なり、他の魚類又は動物によつて成長するものであるから本邦産の諸類に就ても之等の關係が研究されて欲しいものである。

更に右に次いで年齢研究又は年齢と成長との關係の研究であるが、此の研究は非常に多い。云ふまでもなく之は鮭鱒類に就ては一般に鱒によつて年齢を知る事が出来るからで、從來鱒の研究即ち年齢の研究と云ふ事に考へられ非常に多くの研究が發表されてゐる。始めは鱒の研究も單に鱒面にあらはれた年齢によつて年齢を判斷するぐらいの事であつたが、研究の進むと共に年輪の出來かたが其の魚の成長度を示し、鱒面に河川成長、河口成長、海洋成長等があらはれてゐる事が明かにされ、又産卵痕の存在も證明されて鱒によつて鮭鱒の生熊群の辨別まで爲し得る様になつた。此の様な事實の發見されたのは鮭鱒としても最も代表的な所謂サケ、マスに就てであるが、分類的に少しく異なるチカ、キウリ、シニヤム其他の類の如きでは未だ研究は充分でなく、此の方面には大分興味ある事實が残されてゐる様である。

以上の如くで年齢に就ての研究は數多いが從來の研究場合加奈院の鮭の幼年のものでは年齢によつて眼の成長率が違ひ古い魚では若い魚に比較して眼徑が非常に大きい爲め兩者は明かに區別され、つまり鱒の年輪數と眼徑との間には明かな相關々係があると云ふのである。

最後に移殖關係の研究としては筆者の手許にはブリチヤード氏（昭和十三年）の研究がただ一つあるのみであるが、此の研究はセツパリ鱒を加奈院のグラハム島東岸のトレル河から、全く此の類を産しないB.C.のクリントン河に移殖した實驗で、昭和六年には脂鰭と左腹鰭とを切斷して標識した仔魚十二萬四千尾と、標識しない仔魚七十五萬四千尾とを放流したところが昭和八年には其の親魚になつたものが四十尾捕獲された。又昭和十年には脂鰭と右腹鰭とを切斷した標識魚十一萬尾と非標識魚四十萬尾とを放流したところ昭和十二年に至り親魚となつたものが四尾再捕されたと云ふ結果を得た。

以上に雜然と述べた所はたゞ近來の歐米の鮭鱒研究のほんの一斑を手許の文献から簡単に御紹介したのであるが、これにて近來外國で大体どんな事が研究されてゐるかはごく大体は覗知する事が出来るかと思ふ。

石狩河口採卵鮭卵の斃死原因に就て

北海道鮭鱒孵化場 岡田 雋
同 千歳事業場 三浦 五郎

一、石狩河口採卵鮭卵の斃死状況

昨年十二月本場では千歳孵化場の收容卵充實を計る目的を以て、石狩河口で捕獲された鮭親魚の中から、合計二、七二七、五〇〇粒を採卵し、之を千歳孵化場へ輸送收容したが、收容後之に死卵が頗しく發生し殆んど全滅に

瀕するまでに至つた。石狩河口に於ける採卵は今後も施行の豫定であるから、此の際その原因を究明して向後の対策を講ずることが必要であるので、一月二十七日命を受け千歳孵化場は於て斃死原因の調査に當つたが、當時の状況は次表の如くであつた。

順次	採卵月日	到着月日	捕獲方法	採卵數	運搬害死卵率(%)	殘存生卵數	淘汰死卵數	淘汰檢卵施行月日	殘存生卵に對する淘汰する總死卵率(%)	採卵數に對する斃死卵率(%)
第一回	十二月三十一日 十二月二日	十二月七日	曳網 刺網	四三〇,〇〇〇 一五〇,〇〇〇 五五〇,〇〇〇	八七・五 七九・七 八五・六	三三三,〇〇〇 二七,五〇〇 八〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇 二二,五〇〇 五五,〇〇〇	一月十三日	六・六 八九・二 七四・四	九五・八 九七・七 九六・三
第二回	十二月十三日 十二月十二日	十二月十四日	曳網 刺網 混合	五五〇,〇〇〇	八〇	四三〇,〇〇〇	一二〇,〇〇〇	一月廿二日	五・四	六四・九

第三回	十二月廿一日 十二月廿二日 十二月廿三日	十二月廿七日	曳網 刺網 混合 判明の 計	一、九七五、〇〇〇 一〇〇,〇〇〇 一、一四五、〇〇〇	二七・八 二〇・〇 二六・七	一、四五〇,〇〇〇 一、〇〇〇,〇〇〇 九七九、〇〇〇	(一月十五日) 一部分施行 (未施行)	七三・五	七九
寄附卵	十二月十六日	十二月二十日	曳網	三三三、〇〇〇	一八・八	三三三、〇〇〇	一月廿二日	七三・五	七九

前表揭示の如く、石狩、千歳孵化場間輸送中に斃死した所謂運搬害死卵を除去し殘存生卵を收容飼育中であつたが、この殘存生卵に次第に頗しく死卵が發生し始めたのであつて、發眼期に淘汰法施行の結果その數は更に増加し死卵總計は表示の如くなつた。今最初の殘存生卵に對する割合を算出して見ると五三・四一八九・一%と云ふ斃死率を示してゐる。更に運搬害死卵をも此の死卵に加へ採卵數に對する割合を算出した結果は最下欄記載の如く六四・九一九七・七%である。

尙ほ第三回卵だけは極く一部分を檢卵したに止り、淘汰檢卵未施行であつた爲め收容後の死卵發生數が不明であつたが、現存する死卵數を孵化盆十枚に就て實際に計算した結果、孵化盆一枚に平均八〇〇粒の死卵が存在することが判明したので、之から現在の總死卵數及その殘

存生卵數に對する割合を算出して見ると、曳網刺網混合の分は四〇七、二〇〇粒(四三・五%)、刺網の中判明の分は三二、〇〇〇粒(五三・三%)と云ふ結果になつた。然し淘汰法を施行した後では此の死卵率は更に上騰するであらうと思はれる。

以上の如く死卵の出現が甚だ頗しいが、之は淘汰以前に多いのであつて淘汰後には死卵の發生は甚だ少くなつてゐる。依つて斃死の原因は淘汰以前の卵に就て調査することを要する。此の目的の爲には第一回、第二回、寄附卵は既に淘汰法施行の爲不適當であるが、第三回卵のみは淘汰未施行で初期からの死卵がそのまゝ現存するので調査の上に都合が好い。今此の第三回卵の檢卵未施行の部分から死卵及生卵を若干個宛無選擇に採つて之等を「ピクロ硫酸」に浸漬して胚体の有無を調査した處次の

如き結果を得た。

種類	死		卵		生		卵	
	受精卵	不受精卵	計	受精卵率(%)	受精卵	不受精卵	計	受精卵率(%)
刺網曳網混合	0	538	538	0.0	336	362	598	55.6
刺網の中判明のみ	0	460	460	0.0	29	533	562	5.2

右の如く死卵の全部が不受精卵で、生卵の中にも不受精卵がまだ類しく混じてゐることが解つた。即ち今回の死卵發生は不受精卵が非常に多いことに原因し、之が次第に白濁して死卵となつて現はれ、淘汰の實施により殘餘の不受精卵も此の際全部白濁して死卵となり、その爲めに以後の死卵出現が激減するに至つたものと推定される。

然らば何が不受精の原因となつたかを考究すればよいのであるが、茲にこの不受精卵は果して眞の不受精卵か或は受精後發生の初期に胚体が斃死(若くは發育を中止)した爲一見不受精卵の如く見へるものではないかとの疑がある。この點に就ては採卵時より時日を経過してゐるので形態的には殆んど之れを確かめることが出来なかつたが、石狩に於て採卵後卵子の處置に次の如き事實があつた。

た爲に此の疑は甚だ深いのである。

即ち前掲の表に見る如く、種々の事情に依つて採卵々子は即日輸送されずに三日分を一括めにして送られてゐる。此の間採卵々子は一〇萬粒位宛四斗樽に收容され之に厚く水を張り、防寒設備を施して屋内に静置された。斯くして三日目の採卵まで初日及翌日の卵子は放置されたのであるが、三日目の採卵々子も即日輸送されないので同様樽中に收容されたこともあるから、長きは數日に亘つて樽中に放置されたこともある譯である。勿論日に二三回樽中の水は換へられたであらうが、斯の如き處置に於ては卵層の下部が窒息斃死するであらうことは容易に想像されることで、此の際に窒息したものが千歳收容後次第に白濁して死卵となつて出現したものではないかとの疑が深い。

右の如く今回の斃死原因に就ては死卵が眞の不受精卵であるか、或は受精後發生の初期に斃死したものであるか明確にすることが出来ない爲、此の兩者の場合に就て種々原因を調査考究したが、その中で最も大なる原因をなしてゐるものは、前述の如き處置に依る發生初期の斃死に基くと推定された。依つて此の推定が果して適中してゐるかどうかを確かめる爲に次の如き實驗を行つて見たのである。

二、推定原因に關する確認試験

1、試験場所 千歳孵化場

口、試験期間 昭和十四年一月三十日開始、四月六日終了。

ハ、供試卵 千歳孵化場附屬西越採卵場にて一月三十日採卵せるものを同日試験に供す。試験には運搬害死卵を除去し生卵のみを使用す。

二、試験方法 試験區として石油罐の充分洗滌して油分を完全に除去したるもの三個を用意し、之に供試卵を約三萬粒宛收容する。然る時は卵層の厚さは一五糎となる。之に清水を深さ二〇糎程まで注ぐ。然る時は卵表面よりの水深は五糎となる。之等の罐を八度の流水中に頸まで浸漬して内部の水溫を不變ならしめ、第一試験區は一晝夜、條二試験區は二晝夜、第三試験區は三晝夜そのまま放置とする。所定時間放置後靜かに之等を「アトキンス」孵化器「スタック」宛に移し代へ通例の如く孵化槽内に收容する。之等に對し對照試験區として約三萬粒を直ちに「アトキンス」孵化器「スタック」に收容したるものを通例の如く孵化槽内に收めた。而して二〇日目、三〇日目、四〇日目に檢卵、四〇日目檢卵施行後淘汰を行ひ、六九日目孵出完了と共に試験を終つた。

ホ、試験結果 各檢卵日に於ける死卵累計を表示すると次の如くである。

供試卵數	死卵累計		收容當時		受精後		受精後		受精後		受精後	
	對照區	試驗區	(0.0)	(0.0)	二〇日目	三〇日目	四〇日目	目淘汰法施行	五〇日目	目孵出終了	(9.9)	(9.9)
1,138	1,138	1,138	0	0	1,138	1,138	1,138	1,138	1,138	1,138	1,138	1,138

第一區	三、二、九	三、四三(一・一)	一、五七(四・九)	二、五八(七・九)	四、二二(三・二)	六、六六(三〇・九)	七、五五(三・九)	八、四三(三六・〇)
第二區	三、四四〇	三、四八(一・一)	三、六九(三・七)	一、八、六六(六・一)	二、四六(六・三)	二、九二(七六・〇)	三、五五(六・〇)	三、六、三三(三・五)
第三區	三、〇、五二	三、五三(一・一)	四、三六(三・九)	一、七、五五(五七・六)	二、四三(四七・七)	二、八、三〇(九〇・八)	二、八、三九(九・七)	二、六、〇六(六三・四)

尙前表をグラフを以て圖示すると次頁の如くである。

へ、試験経過 前掲の圖及表に依り死卵發生の経過を概説すると各區共初めは殆ど死卵の出現がなかつたが十日頃より次第に現れ始め、二十日目には對照區、第一區は四一五%の死卵率を示したが第二區、三區は一〇%を越へた。三十日目(發限期)には前二者は七%内外であるが後者は五〇%を越へてゐる。四十日目には對照區約八%、第一區が稍々悪く約一三%、第二區に至ると急に不良となり約七〇%、第三區は更に悪く約八〇%となつてゐる。四十日目に淘汰を行つて四十二日目に觀察した結果は死卵出現に稍々奔騰を見、對照區約一四%、第一區約二一%、第二區七六%、第三區九一%となつた。次に孵出完了の六九日目まで死卵の發生は極めて輕微に經過してゐる。

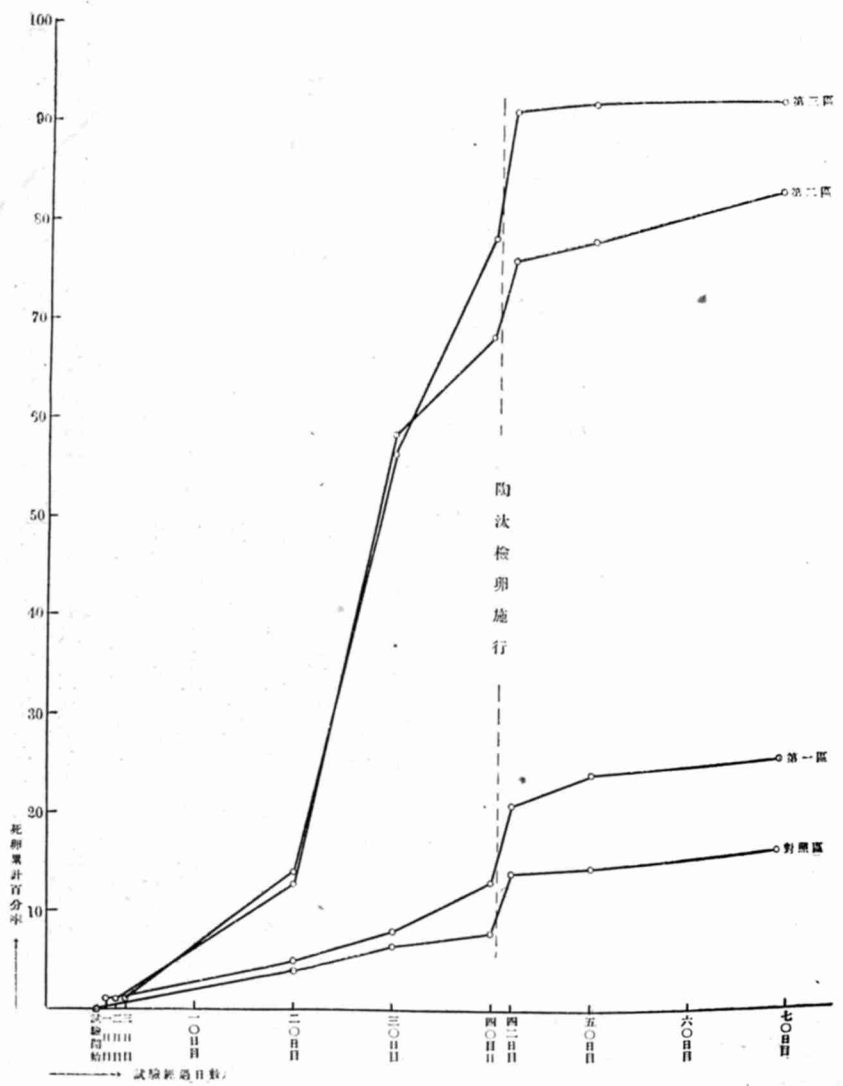
之を以て見ると一晝夜止水中に放置しても既に若干の悪影響を認めるが、二晝夜以上放置する場合は明かに甚大なる悪影響を及ぼすことが解る。而してその死卵發生

は急激に出現することはなく十日頃より徐々に現れ、淘汰施行後に激減することは前表に依つて解る通りである。

ト、死卵の性状 今三十日目檢卵の際に死卵を各區から三百粒宛採つて「ピクロ硫酸」に浸漬し胚体の有無を検した處次の如き結果を得た。

試験區	受精卵	不受精卵	受精卵率(%)
對照試驗區	一三	二六七	四・三
第一試驗區	一五	二六五	五・〇
第二試驗區	一一	二八九	三・七
第三試驗區	五	二九五	一・七

右表の如く死卵の大部分は一見胚体の存在を認め得ぬ不受精卵様のものである、従つて本試験中に發生した死卵の大半は斯様な不受精卵様のもつと見て差支ないであ



らう。然し同一系統の卵子を四分して試験に供したのにも拘らず對照區を除き各試験區殊に第二、第三試験區に於て不受精卵の著しく莫大なのは甚だ不合理と云はなければならぬ。之より考察すると死卵の大部分は受精卵であるが、發生の初期に斃死した爲胚体の識別困難で一見不受精卵の如く見えるものであると考へられる。

三、結 び

前項の實驗に依つて受精直後卵を止水中に一日以上放置すると甚しき悪影響を及ぼして死卵の續出することが解つた。然しその影響は直ちに現はれることなく、十日頃より徐々に現はれ始めるが、二十日目乃至四十日目に最も著しく現れ淘汰施行後には消失する。その死卵は一見不受精卵の如く見へるが、發生の初期に斃死したものが大部分であると考へられる。

今此の試験の經過を熟視すると石狩の卵子の斃死状況と甚だ酷似してゐることを認めるであらう。即ち石狩の卵子も受精直後に長きは數日間止水中に放置されてゐるが、その死卵發生も直ちに現はれず次第に増加して來て三十日目前後に最も甚しく、淘汰施行後には消失してゐる。

鮭鱒孵化事業發祥の地に 記念碑建設に就て

菊 地 覺 助

札幌に於ける聖跡に偕樂園がある。明治八年長くも明治大帝本道御巡幸の砌、園内の清華亭に御小休みの際御茶の湯に御使用になつたものは同じ園内に滾々として湧出するそれでありと稱へられ現在御膳水の標柱が建立されて居る。然るに此の湧水は明治十年偶然にも北海道廳の鑑詰御雇教師ユー・エス・トリート氏が鱒孵化試験を始めてやつた處で、つまり本道に於ける鱒孵化事業の發祥地である。

筆者も明治三十八年始めて渡道するや偶然ながら偕樂園のこの湧水川の側の今でも在る家に寄寓した事がある。當時園内には清華亭の外に二軒より無く、現在數百戸建てられて居るのを見ては眞に隔世の感がある程であるが、兎に角園内を貫通して居る此の湧水川は北海道大學構内を通り結局石狩川に注ぐのであるが、晩秋からかけて鮭が浜上し偕樂園附近で産卵するので淺瀬の産床に鮭が背を出して居ることも稀でなく、此

る。又その死卵は一見不受精卵の如き外觀を呈する。之等を以て考察すると此の實驗は細い點では石狩に於ける處置と種々條件が異つてゐるが、少くも受精後止水中に長く卵子を放置したことが決して良い影響を與へなかつたことを示してゐると思ふ。尙ほ石狩の斃死原因にはその外種々の因子が働いてゐることは否定出來ないが、此の實驗から見ても前述の處置が最も大きな原因となつて居るであらうことは疑ない。従つて今後は出來る丈採卵後は長く放置せず直ちに荷造りして輸送するのが最も安全な處置であらうと思ふのである。

の沿岸の人々が樂みに捕つて居つた事は勿論であり、これが捕れば密漁であることも知らなかつた筆者の如きも、明治三十八年の晩秋から一月頃迄にかけて十數尾を戯れに採捕した經驗を持つて居る。今でこそ家が密集し此の小川にもかなり穢物も投棄されてをるやうだが、當時は實に清麗掬すべき湧水川であつた。

前記湧水個處は道路に接近した極く狭いところであるが流域も多少整理されて居り、此の貴重な鱒鱒孵化事業發祥の地に記念碑を建設して御膳水と共に永久に傳ふる事は寔に適當なる企であり、之を鮭鱒保護協會の手によりて建設される事は最も有意義なりと思惟し、網走町で開催された本會總會に提案した次第である。實は昨年本道で日本水産學會が開かれた節札幌市見物個處の一に加へられたのであつたが、前學會長の理學博士藤田經信先生からの記念すべき地も世に忘れられて終ふ事は洵に遺憾であると筆者に御話があり、予も亦懐かしき思ひ出と共に深き感激を以て提案した次第であるが、幸ひに萬場一致の賛成を得た事は眞に慶賀に堪へないと共に、今後之が具体化に努力したいと思つて居る。

尙偕樂園には聖跡保存會といつたものがあり市役所教育課等にも記念碑建設に關する意向を聞いて見たが何づれも賛成であつたことを附記する。

昭和十三年度鮭親魚捕獲採卵成績

場名	捕獲數		使雄數	用雄數		採卵數	期間 自月日至月日
	雌	雄		雌	雄		
本場	三,九九九	一四,五五九	一,一七九	四三五	一,六四四	二,七五五,七〇〇	一〇・三
千歲	二五,八九九	一六,三三三	三,八〇八	八,九九八	三二,八六六	六〇,九六二,五〇〇	一〇・一
尻別	一,三四四	一,六六三	一,〇三三	四〇三	一,四三四	二,五四五,〇〇〇	一〇・一
朱太	一,八六六	二,六六八	一,七〇八	一,二一八	二,八六六	四,三四七,五〇〇	一〇・一
敷生	一,二二二	一,三〇一	九二二	四七七	一,三〇〇	二,五五六,四〇〇	一〇・一
勇拂	四三三	七九七	四二二	二〇四	六二五	一,〇七九,五〇〇	一〇・一
新冠	二二五	二九九	一六三	七四	二二六	三三,三〇〇	一〇・一
染選	一,三二六	八三三	九三三	三九八	一,三三〇	二,一七〇,〇〇〇	一〇・一
三石	三三九	二七四	三二〇	一九六	五二六	七〇,〇〇〇	一〇・一
元川	三三〇	二八一	三〇八	一八九	四九七	七七,五〇〇	一〇・一
幌別	六七八	六三八	六五六	一九八	八五四	一,四一〇,〇〇〇	一〇・一

場名	捕獲數		使雄數	用雄數		採卵數	期間 自月日至月日
	雌	雄		雌	雄		
十勝	三三,一五三	二七,九九九	一六,三三三	一〇,三六五	三六,九七五,〇〇〇	一〇・三	
天鹽	二,三三三	二,三二七	一,五七〇	六九〇	二,三三〇	四,一一五,〇〇〇	一〇・一
德志	二五五	三六六	一九九	〇七	二六六	五〇〇,〇〇〇	一〇・一
頓別	一,四三三	二,〇八二	一,〇〇九	四二二	一,四七〇	二,六二七,〇〇〇	一〇・一
虹別	五,一五九	一四,七九四	四,三三九	二,四八八	六,六九七	九,五六〇,〇〇〇	一〇・一
雪裡	八九三	一,八九一	八八八	四〇〇	一,二五八	二,一五五,〇〇〇	一〇・一
釧路	二,八六八	四,三七九	二,六三〇	一,四六三	四,一一三	七,〇〇〇,〇〇〇	一〇・一
尾幌	一,四〇四	一,六四五	一,三三六	八八一	二,〇七〇	二,四八五,〇〇〇	一〇・一
風蓮	三,七七三	五,七四三	二,九二六	二,六二六	五,五三四	五,一九七,五〇〇	一〇・一
當幌	二五五	三七四	一六六	一〇〇	二六六	四〇〇,〇〇〇	一〇・一
標津	二,一七三	二,九一七	一,八六〇	一,二五五	二,九九五	三,五七二,五〇〇	一〇・一
伊仁	九,八三三	一七,三六四	二,三三三	一,三三四	三,五五九	五,四三〇,〇〇〇	一〇・一
薰別	九,三六九	二二,四三七	五,九三五	四,七三三	一〇,六八〇	三,三三〇,〇〇〇	一〇・一
北見	四,四八三	二二,一八八	四,〇九一	一,七六二	五,八三三	一,〇三三,〇〇〇	一〇・一
斜里	一,三三八	一,一八九	一,一八九	四五四	一,六三三	二,七九五,〇〇〇	一〇・一
網走	七,九九八	一,一八〇三	四,九八九	一,八四二	六,八三二	二,一七五,〇〇〇	一〇・一

○昭和十二年度鮎漁獲高調

支 離	石 狩	後 志
河 川 名	濱 益 川 厚 田 川 計	余 市 川 古 平 川 幌 内 府 川
漁獲高(貫)	四一六 四一六 五	一五〇 九五一 一

余 別 川	古 宇 川	野 東 川	尻 別 川	朱 太 川	折 川
本 流	目 名 川	昆 布 川	計		
九、五〇〇、〇〇〇	四、二八〇、〇〇〇	三、九六六、〇〇〇	三、五九三、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	二、六六六、〇〇〇
一〇、一五〇、〇〇〇	一〇、一五〇、〇〇〇	一〇、一五〇、〇〇〇	一〇、一五〇、〇〇〇	一〇、一五〇、〇〇〇	一〇、一五〇、〇〇〇

前 年 度	計	天ノ川	厚澤部	利別	知内	渡島
三三三、五四一	三三〇、七〇八	三二五	一、八三三	二、四五二	一、六五三	四、六六一
三三三、九三三	三二七、〇五五	二七五	一、九三〇	三、〇六三	三、八九五	三、一九八
五三六、四三三	五三四、三六三	五八八	三、八三三	六、〇〇四	五、五四七	七、五九九
一五四、九二二	一五二、〇七九	二二八	一、四九七	一、四四四	一、五〇一	三、五六九
八六、四七一	八六、三三九	二三四	七五六	三八四	六〇二	一、九〇三
二四一、五九三	二三八、二〇八	三四三	二、二五三	一、八八八	二、一〇三	五、四三三
三六二、四〇〇	三五八、四〇〇	三五七、五〇〇	三、五九三、〇〇〇	三、九六六、〇〇〇	四、二八〇、〇〇〇	九、五〇〇、〇〇〇
			三、五九三、〇〇〇	三、九六六、〇〇〇	四、二八〇、〇〇〇	一〇、一五〇、〇〇〇
			三、五九三、〇〇〇	三、九六六、〇〇〇	四、二八〇、〇〇〇	一〇、一五〇、〇〇〇
			三、五九三、〇〇〇	三、九六六、〇〇〇	四、二八〇、〇〇〇	一〇、一五〇、〇〇〇

比 良 糸	當 路	別 飛	有 萌	紗 那	年 萌	羅 白	老 門	擇 捉	泊	音 根 別	温 根 沼	二 木 城	國 後	幌 内	興 部	常 呂
二、五〇一	一〇、九六〇	九、九七〇	一、八五四	一七、七四一	四、五八三	三、四七九	三、七六六	四、三九五	八九五	一、四九三	四六三	六、九三三	四、七三四	四、四三三	六、四〇〇	九、〇八二
四、一九五	一三、九二八	二、〇三〇	四、四九七	三、八三三	一〇、九四〇	七、六〇四	八、九五四	六、九九八	一、〇六二	一、九七八	四九五	五、三四〇	六、一七〇	七、三二二	五、八三三	一一、三三〇
七、四一六	二四、八七八	三、〇〇〇	六、三五一	六、〇七三	二五、五三三	二一、〇八三	二、七七〇	二、三九三	一、九七七	三、四七一	九三三	三、二六二	一〇、九四四	一、七五五	一、三三三	二〇、五〇一
二、三五一	六、八九七	七、一九五	一、五九八	一、四九六	二、三二七	二、八〇〇	三、五二一	三、五四九	七、七七一	一、二五五	四、九二	五、一八一	四、四〇一	三、一四	五〇一	二、九六六
二、〇九七	四、五二一	八、三〇五	八、五八	八、〇四三	一、三四〇	一、三三五	一、七五六	一、七八	四三三	七四四	一、五六	三、〇七	二、六五九	一、五〇	一、六九	一、五二六
四、四四九	二、四〇八	一、五、五〇〇	二、四五六	二、三三九	三、六五七	四、九九五	五、二六七	五、二七七	一、二〇七	一、九九七	五、八五	八、二二八	二、六六〇	四、四	六、七〇	四、五〇一
五、一〇〇、〇〇〇	一、〇一〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
二、一五六	二、一〇五	二、一〇五	二、一〇五	二、一〇五	二、一〇五	二、一〇五	二、一〇五	二、一〇五	二、一〇五	二、一〇五	二、一〇五	二、一〇五	二、一〇五	二、一〇五	二、一〇五	二、一〇五

檜山	馬場川	利別川 本流	種 小本流	太櫓川 小計	小川	白別川	砂貝取淵川	見市川	姫市川	湖田川	厚澤部川 本流	安野呂川
千泊平	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計
三三三	一六七	二、三三三	一、四〇〇	一、二九〇	二九〇	二九〇	二九〇	二九〇	二九〇	二九〇	一、二九〇	一、二九〇

前年度	合	渡島	茂草川	及部川	福島川	知内川	木古内川	茂邊地川	汐泊川	落部川	計	厚澤部川 計	天ノ川	石崎川	青苗川	釣懸川	鹽釜川	計	
二〇、一八九	三三、六七〇	一、二五〇	一、二五〇	一、二五〇	一、二五〇	一、二五〇	一、二五〇	一、二五〇	一、二五〇	一、二五〇	一、二五〇	一、二五〇	一、二五〇	一、二五〇	一、二五〇	一、二五〇	一、二五〇	一、二五〇	一、二五〇

○昭和十四年度北海道鮭鱒孵化場
事業方案概要

一、鮭鱒孵化事業

本道鮭鱒漁業の安定を期するには最少限度に於て鮭八萬石、鱒十七萬石の年漁獲高を必要とし、右漁獲高を得るために、本場に於て鮭卵三億五千萬粒より稚魚三億一千五百萬尾、鱒一億三千五百萬粒より稚魚一億二千一百五十萬尾を人工孵化放流すると共に未開地方河川の天然蕃殖を極力保護し鮭卵八億二千五百萬粒より一億六千五百萬尾、鱒卵四十四億四千萬粒より八億八千八百萬尾を孵出せしむる計畫なり。

二、姫鱒孵化事業

支笏湖の生産に資するため、前年同様姫鱒卵二百萬粒より一百八十萬尾を孵化放流せんとす。

三、害敵驅除、密漁取締、稚魚保護

鮭鱒孵化事業の効果を一層確實ならしむるため本場親魚捕獲受託者及關係各団体と協力し施行せんとす。

四、試験、調査

(一) 試験

(1) 孵化事業に關する試験

イ、鱒未熟親魚蓄養並に採卵試験(繼續)
ロ、標識方法の改良並に標識の游泳に及ぼす影響に關する試験(繼續)

ハ、洄歸試験(繼續)

ニ、鮭鱒卵子運搬方法改良試験(繼續)

ホ、養魚池日射防止法改良試験

ヘ、鮭卵砂利層埋没孵化試験(繼續)

ト、孵化器改良試験

チ、鮭稚魚の標識放流試験

リ、未熟親魚の催熟試験

(2) 淡水々族養殖に關する試験

イ、山女採卵孵化並に飼育試験

ロ、オシヨロコマ採卵並に飼育能否試験(繼續)

ハ、水産連絡試験中鱒族飼育改良試験(繼續)

ニ、公魚湖沼移植試験

ホ、八ツ目鰻人工孵化試験

(二) 調査

(1) 水族に關する調査

イ、鮭鱒調査(繼續)

ハ、水族生態調査(繼續)

ハ、稚鮎の湖上調査(繼續)

ニ、留別沼及キモン沼に於ける鮎産卵時期及湖上調査

(2) 水面利用に關する調査

イ、河川調査(繼續)

ロ、水力發電用堰堤に依る河川洪水區域利用調査

(繼續)

ハ、別飛沼調査

ニ、水質檢定

五、種卵、種苗の移植並に配付

(1) 事業用鮎種卵移植

(2) 豊平川鮎卵移植

(3) 層雲峽虹鱒卵移植

(4) 虹鱒種卵配付

(5) 養殖及學術研究用種卵配付

六、指導

(1) 講習會

(2) 講話會

(3) 實地指導

(4) 其の他の指導

○紅鱒種卵分譲

擇捉島ウルモベツ谷紅鱒孵化場本年度採卵数は意外に多く従つて各地の移植用種卵として相當数の分譲可能の見込に付希望者は至急直接同氏若くは北海道鮎鱒孵化場へ申込まれ度

會報

○第十一回總會記事

本會第十一回總會は去る六月五日網走町役場會議室に於て開催せり。概況を左に要録す。

一、出席者

(順序不同)

- 稻垣 龍 半田 芳男 水澤 一郎
- 大槻 豊 金澤 兵次郎 淺野 政勝
- 小川 助次郎 齋藤 憲彰 大西 眞平
- 大尊寺 政治 岩佐 忠重 渡邊 寛三郎
- 後藤 久吉 佐藤 庄司 高木 成夫

名ナリ。

二、機關誌ノ刊行

鮎鱒報第十年第三十五號ヨリ同第三十八號迄發行シ會員及其ノ他ニ配布セリ。

三、其ノ他印刷物ノ刊行

鮎鱒孵化事業ノ成績ヲ周知セシムル爲人工孵化事業成績一覽表一千枚ヲ印刷配布セリ。

四、會 議

第十回總會ハ十三年七月九日層雲峽ニ於テ開催シタルニ出席者四十五名ニシテ盛會ナリキ。

五、養鱒試驗

北海道鮎鱒孵化場空池ヲ借用シ實施セルモ夏期未嘗有ノ早較ニ會ヒ用水潤渴セルタメ中止スルノ已ハナキニ至レリ。

六、應召者及傷病兵慰問

本會々員及孵化事業關係者ニシテ應召セル者七名ニ對シ慰問袋ヲ贈呈シ又第十回總會ノ節層雲峽陸軍病院ニ傷病兵ヲ慰問セリ。

七、其ノ他ノ事業

(イ) 農林省主催鮎鱒調査會、北海道樺太連絡水産調査打合會及日本水産學會大會ノ本道ニ開催セラル、ニ當リ本會ノ趣旨、事業及宣傳ノ爲ノ説明及接待ヲ爲シタリ。

(ロ) 獨逸ヒットラーニューゲントノ來道ニ際シ本會ヨリ孵化事業狀況説明書及繪葉書ヲ贈呈セリ。

(ハ) 千歳孵化場創立五十周年ヲ迎フルニ當リ本會ハ時局ニ

二、經過

(一) 報告事項

報告第一號 昭和十三年度事業報告

一、會員數(昭和十四年三月末日現在)

一種會員 百 貳 名

二種會員 百六拾五名

親魚捕獲受託者 三十二名
養殖事業經營者 十六名
鮎鱒漁業者 五十四名

計 貳百六拾七名

備考 十三年度中ノ異動ハ死亡一名、入會十四名、脱會三

鑑ミ質實ナル祝意ヲ表セムガ爲ニ鮭鱒彙報第三十八號ヲ記念號トシテ内容ヲ充實スルト共ニ記念繪葉書ヲ發行シ會員及關係各方面ニ配布セリ。
右滿場一致承認サル

報告第二號 昭和十三年度決算報告

一、經常部

收入

科目	預算	決算	對比		說明
			増	減	
一、會費	1,025.00	620.00		405.00	一種會員 八六名 八三圓 二種會員 三五名 二五圓 施行セザリシニ依ル
二、事業收入	400.00			400.00	利子五圓五三錢、設計料七圓、雜誌及印刷物賣却代七圓八錢
三、雜收入	250.00	148.40		101.60	經常部繰越金三圓九錢、臨時部繰越金六圓四角線入
四、前年度繰越	634.94	634.94			一種會員 四名 二圓 二種會員 七名 二圓
五、過年度收入	150.00	16.00		134.00	
計	2,459.94	1,479.34		980.60	

三月三十一日現在殘金 一、七三七圓六六錢

收支引	經常部		臨時部	
	算入	算出	算入	算出
收入	2,507.94	1,711.34	3,655.00	3,659.66
支出	2,507.94	1,700.33	1,350.00	1,933.33
差引			殘二・二三	殘一、七二六・三三

支出

科目	預算	決算	對比		說明
			増	減	
一、給與	330.00	258.25		71.75	事務員給料及事務囑託者手當三六圓五錢、寄稿謝禮三圓
二、事務費	270.00	277.66		7.66	圖書外四點、其他筆墨用紙代
三、事業費	1,350.00	581.81		768.19	總會出席旅費
印刷費	400.00	381.10		18.90	彙報公口部代、別刷部代、鮭鱒人工孵化成績一覽表一〇〇枚代、鮭鱒孵化事業繪葉書五〇組代、總會議案五冊代、其他
會議費	350.00	319.61		30.39	總會一回、役員會一回
養鱒試驗費	50.00			50.00	事業施行セザルニ因ル
助成費	500.00			500.00	助成セザルニ因ル
應召者慰問費	50.00	34.10		15.90	應召者七氏ニ發送セル慰問袋代
四、雜費	100.00	120.23		20.23	
五、會長交際費	250.00	401.93		151.93	
六、豫備費	107.94			107.94	
計	2,507.94	1,470.21		1,037.73	

差引殘金 拾壹圓拾參錢也

二、臨時部

科目	預算	決算	對比		說明
			増	減	
一、親魚捕獲受託者酬金	三、六三〇・〇〇	三、四七一・〇〇	—	—	二十四名分
二、雜收入	五〇・〇〇	一六・七六	—	—	記念號廣告料二五圓〇錢、利子八圓六錢
計	三、六五三・〇〇	三、六三九・七六	—	—	

支出

科目	預算	決算	對比		說明
			増	減	
一、寄附金	一、〇〇〇・〇〇	一、九三三・三三	九三三・三三	—	別記ノ通
二、雜費	五〇・〇〇	—	—	—	要セザリシニヨル
計	一、〇五〇・〇〇	一、九三三・三三	九三三・三三	—	

差引殘金 一、七二六圓五三錢 次年度へ繰越

寄附金説明

一、北海道鮭鱒孵化場設備寄附 三三五圓三四錢

- 一、農林省主催鮭鱒調査會寄附 三四七・一〇
 - 一、故小池仁郎氏銅像建立費寄附 五〇〇・〇〇
 - 一、千歲孵化場創立五十周年記念寄附 七三〇・七九
- 右滿場一致承認サル

(一) 協議事項

協議第一號 昭和十四年度事業計畫並收支豫算

一、事業計畫

時局ニ鑑ミ且本會收入減ノ狀況ヲ參酌シ事業ヲ縮少計畫セムトス。

一、機關誌ノ發行

從來ノ彙報ノ紙數、紙質ヲ低下シ且發行部數ヲ年ヲ通シ一千部ニ限定ス。

二、會議

總會一回、役員會一回

三、普及宣傳

孵化事業ノ趣旨、効果ノ普及宣傳ヲ目的トスル事業ノ實施又ハ之ニ助成セムトス。

四、其ノ他ノ事業

緊要已ムヲ得ザル事業ノ實行ヲ餘儀ナクセラレタル場合ニハ役員ニ於テ協議ノ上善處セムトス。

二、收支豫算

事業ヲ縮少セル結果收支豫算モ之ニ應ジ極力節約ニ勉ム。

(一) 經常部 收入

科目	預算	摘要
一、會費	四〇〇・〇〇	一種會員 三二五圓 受託者 二元 一名 五圓 二五圓 養殖者 一圓 一名 五圓 七五圓 漁業者 一〇〇 統一 一〇〇
二、寄附金	三〇〇・〇〇	篤志者寄附
三、雜收入	三〇〇・〇〇	利子、設計料、印刷物代、其他
四、過年度收入	一〇・〇〇	
五、前年度繰越	一一・二三	
計	一、〇六一・二三	

說明

一、一種會員中親魚捕獲受託者ハ鮭鱒保護組合ノ組織ニヨリ孵化場ニ對スル協力ノ爲多額ノ負擔ヲ爲スニ至リタルヲ以テ本會會費ハ年額一名平均五圓ニ改正セムトス(會則ノ改正ヲ要ス)

一、篤志者ノ寄附ハ前項ニヨリ本會ノ收入ヲ激減スルニ至ルヲ以テ保護組合其他ヨリ協力ヲ得ントスルモノナリ。

支出

科目	決算	摘要
一、給與	二五〇・〇〇	事務囑託手當二〇〇〇圓 寄稿謝禮五圓
二、事務費	一〇〇・〇〇	筆、紙、墨、文具費
需要費	三〇・〇〇	
通信運搬費	四〇・〇〇	
旅費	三〇・〇〇	職員旅費
三、事業費	五七五・〇〇	
印刷費	三三〇・〇〇	榮報一〇〇部代 一〇〇圓 其他五〇〇部代 三三〇圓
會議費	二五〇・〇〇	總會一回三〇〇圓、役員會一回五〇圓
普及運搬費	一〇〇・〇〇	
四、雜費	一〇・〇〇	
五、會長交際費	一〇〇・〇〇	
六、豫備費	一六・一三	
計	一、〇六一・一三	

説明
一、一般的ニ節約セリ。
一、印刷費ハ榮報ノ紙質ヲ低下シ且發行回数ヲ減少ス。
一、孵化事業ノ普及宣傳ヲ爲ス費用ヲ計上セリ。
(二)臨時部

明年度總會迄ニ役員會デ協議ノ上原案ヲ作り其上總會デ協議スル事ニ決定ス
協議第五號 次回總會開催ノ件
帶廣市ニ決定ス
協議第六號 本道鮭鱒孵化場發祥地記念碑設置ニ關スル件

本件ハ會員菊地覺助氏ヨリ提案アリ(別頁趣意書參照)右ニ付キ經費其他研究ノ上實現ニ善處スル事ヲ理事ニ一任セリ

- 三、視察
イ、北見食品工業株式會社
ロ、網走刑務所
ハ、網走事業場
ニ、天都山
ホ、日水冷蔵庫
ヘ、北洋罐詰工場
ト、郷土館

四、感想
總會開催に當り地元網走外二郡鮭鱒養殖水産組合を始め網走支廳網走町役場其他水産關係団体の熱誠なる支援に依り大過なく進行し、殊に視察に關しては多大の感銘を與へられ誠に有意義なる一日を過したる事を喜ぶものである。謹んで網走町に對し敬意を表するものなり。

科目	決算	摘要
一、前年度繰越	一、七三六・五三	
二、雜收入	一〇・〇〇	利子、其他
計	一、七四六・五三	

備考 右金額ハ本會事業資金トシテ積立ツルモノトシテ緊要已ムヲ得ザル場合ノ外支出ヲ爲サズ
右原案通り承認サル

協議第二號 會則改正ノ件
本會々則第十一條中「親魚捕獲受託者ハ當該孵化場ノ設備ニ應ジ別表ニ依ル」ヲ「親魚捕獲受託者ハ年額金五圓」ト改正セムトス
右原案通り承認サル

協議第三號 役員増員ノ件

本會役員大部分ハ昭和十年七月十五日選任セラレタルニ依リ來ル十五年七月十四日迄任期アルヲ以テ其ノ改選前ナルモ左記ヲ役員ニ選任セムトス。

北海道鮭鱒孵化場長(理事ニ)
右原案通り承認サル

協議第四號 本會改組ニ關スル件

○會員消息

△異動

- | | |
|--------|-------------------|
| 田中 林藏 | 北海道水産試験場稚内支場長に榮轉 |
| 谷口 達三 | 膽振支廳に轉勤 |
| 升田 清 | 北海道水産課に轉勤 |
| 淺黄谷 成城 | 北海道鮭鱒孵化場本場に轉勤 |
| 野田 信俊 | 北海道水産課に轉勤 |
| 菊地 覺助 | 北海道鮭鱒保護組合主事に就任 |
| 會田 庄藏 | 北海道鮭鱒孵化場千歳事業場に轉勤 |
| 大久保 司 | 同 |
| 可香谷 政夫 | 後志支廳に榮轉 |
| 森 五一 | 北海道鮭鱒孵化場天ノ川事業場に轉勤 |
| 秋葉 万次郎 | 岩手縣廳に轉任 |
| 濱口 清 | (舊姓奥村)内閣企畫院に轉任 |
| 石井 久治 | 北海道鮭鱒孵化場虹別支場長に轉勤 |
| 星野 克巳 | 同 |
| 水戸部 勝次 | 同 |
| 吉野 國之助 | 同 |
| 蟹澤 武雄 | 廣島縣廳に轉任 |
| 川村 輝良 | 東北帝大淺虫臨海實驗所に轉任 |
| 並木 延郎 | 華中水産株式會社南京出張所に轉任 |
| 飯田 毅 | 石川縣廳に轉任 |
| 原 茂 | 入營 |
| 佐々木 正三 | 南洋廳に轉任 |

△出征勇士

横田 徹夫 (函館市役所技手)
江口 弘 (北海道鮭鱒孵化場員)
下山卯之松 (北海道鮭鱒孵化場年蒔事業場員)

△新入會員

小林 修平 北海道鮭鱒孵化場員
山本 孝治 釜山府牧ノ島水産試験場員
富樫 榮助 栖原漁業株式會社員
武田 一雄 函館高等水産學校職員
後山 一夫 北海道鮭鱒孵化場員
磯揚 富太郎 北海道鮭鱒孵化場別事業場員
沖津 哲三郎 北海道鮭鱒孵化場員
丸山 治市 中川郡幕別村大字白人村
宮越 千吉郎 網走外二郡鮭鱒養殖水産組合職員

△死亡會員

檀山 光治君 北海道鮭鱒孵化場羅臼事業場員
齋藤 光雄君 北海道鮭鱒孵化場場長。本會理事

○會費領收報告

△昭和十一年度分

辻 甚五郎 田村 金太郎 町田 秀二

△昭和十二年度分

辻 甚五郎 田村 金太郎 小林 信三
岡村 忍 町田 秀二

寄稿 歡迎

- 一、鮭鱒、淡水々族、淡水養殖、河川、湖沼等に關する理論及應用兩面の寄稿を歡迎す。
- 一、本誌に掲載せるものには薄謝を呈す。
- 一、希望別刷數は原稿に明記され度し。三〇部までは無代進呈す。
- 一、原稿用紙は中越し次第郵送す。
- 一、本誌は年四回(三月、六月、九月、十二月各下旬)發行の豫定に付、原稿は發行豫定日の約一ヶ月前迄に、鮭鱒彙報編輯事務委員(北海道鮭鱒孵化場内)宛御送附あり度し。

△昭和十三年度分

久保田 留藏 岡田 庄高
近藤 賢雄 小田 修平
齋藤 光三 江林 常與
武田 重秀 菊地 覺助
梨本 武治 高橋 恒藏
並木 延郎 武田 尚秀
鶴田 求馬 渡邊 定吉
早 栗 谷 廣 會 友 安 曇
鳥山 恒義 大 友 桂 涉
土屋 仙吉 矢 部 三 雄
飯 野 政 秋 中 山 忠 衛
八木 澤 廣 作 押 山 幸 一
淺 沼 美 義 小 路 口 傳 三 郎
田 村 金 太 郎 白 井 甚 五 郎
村 元 藤 作 辻 山 直 次
小 田 部 敬 止 山 屋 直 次

櫻 井 基 博
升 田 清
蟹 澤 武 雄
池 田 彌 太郎
岡 村 信 忍
野 田 信 俊
富 樫 榮 助
野 口 正 樹
大 久 保 五 郎
三 浦 久 司
小 林 村 輝 良
川 林 彦 七
鴨 志 田 萬 次 郎
秋 本 孝 治
山 本 伊 兵 衛
木 戸 口 伊 兵 衛
町 田 秀 二
小 田 部 景 一
星 野 克 巳

△昭和十四年度分

戸 塚 隆 長谷川 清 吉
宮 越 千吉郎 濱 畑 正 男
石 井 久 治 星 野 克 巳
古 都 儀 一
職 場 富 太 郎

△會費未納の方は至急納入を乞ふ

昭和十四年十月一日印刷
昭和十四年十月五日發行

札幌市南十六條西四丁目五番地
編輯兼 半 田 芳 男
發行人 半 田 芳 男
印刷人 山 藤 國 八
札幌市南二條西六丁目三番地
北海道鮭鱒孵化場内
札幌郡豊平町大字平岸村中之島
北海道鮭鱒孵化場内
發行所 北海道鮭鱒保護協會
電話 五三三五
振替口座 小樽二一四八番